

令和2年度 第2回岐阜県環境審議会企画政策部会 議事録

日 時	令和2年10月26日(月) 10:00~12:00
場 所	OKBふれあい会館第2棟5階 岐阜県職員研修所 大研修室
出席者	<p><委員> 15名 (欠席委員 6名) 広瀬委員、朝田委員、板津委員、伊藤委員、大場委員、奥村委員、加藤委員、小林委員、小森委員、佐治木委員、田内委員、廣中委員、別宮委員、新藤委員(代理:片桐環境・リサイクル課長)、秀田委員</p> <p><県(事務局)> 28名 西垣環境生活部長、青竹環境生活部次長、山田環境生活政策課長、岩田環境企画課長、木村環境企画課課長補佐兼係長、釘野環境企画課主査、浅野環境企画課主事、中畠環境企画課主事、井戸廃棄物対策課長、居波環境管理課長、川口清流の国づくり政策課係長、大野危機管理政策課課長補佐兼係長、松尾商工政策課課長補佐兼係長、正村新産業・エネルギー振興課課長補佐兼係長、亀山観光企画課主査、横山農政課係長、森農村振興課係長、井戸里川振興課係長、兼山農地整備課係長、小木曾林政課技術課長補佐兼係長、川畑恵みの森づくり推進課技術課長補佐兼係長、今井県産材流通課係長、中村森林整備課技術課長補佐兼係長、渡辺建設政策課主事、遠藤都市政策課主査、古田公共交通課課長補佐兼係長、安藤教育研修課課長補佐、元田学校支援課課長補佐</p>

会議の概要

1 開会

2 環境生活部長あいさつ

- ・本日は企画政策部会ということで、皆様方お忙しい中ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、8月の改選により、新たに委員にご就任いただいた皆様方におかれましては、様々な観点からご助言の方をよろしくお願ひしたい。
- ・来年度から5か年の計画となる、第6次環境基本計画の策定にあたり、SDGsの取組の本格化、あるいは国の第5次環境基本計画を踏まえ、これまでの当審議会の全体会や部会において、ご審議を進めていただいた。ご審議を踏まえ、先般、骨子案という形でお示しましたが、その中では、環境、経済、社会、この3つの統合的な発展に向けた分野横断的な取組を進めるということで、持続可能な社会の実現に向けた地域循環共生圏の考え方に立って、これからの地域づくり、あるいは人づくりを進めていくといったことを基本理念とした。
- ・その後、この骨子案は、9月の県議会においてご説明、ご報告をさせていただき、その際には様々なご意見もいただいた。そうしたご意見を踏まえ、県庁内でさらに検討を進めてきた。
- ・本日の部会では、素案あるいは目標指標案など、この計画を進めるにあたっての具体的な内容について肉付けを行ったので、委員の皆様からご意見をいただければと考えている。
- ・また、先般の全体会の中で、環境負荷を低減するというので、この会議において率先してペーパーレスの取組を進めてはどうかとのご提案をいただいたため、本日は机上にパソコンないしタブレットをご用意したので、このような形で進めさせていただきたいと思う。
- ・委員の皆様には、それぞれのお立場、ご経験から、様々な忌憚のないご意見をいただければと思う。本日お示した素案については、まだまだ内容的にも表現的にも荒削りな部分が多々あるため、あらゆる角度から忌憚のないご意見をいただければと考えている。

3 議事

(1) 第6次岐阜県環境基本計画の素案及び目標指標案について

事務局（環境企画課）から素案及び目標指標案の内容について説明を行った。
また、以下のとおり発言があった。

(佐治木部会長)

- ・2回の環境審議会、そして1回の企画政策部会の議論を受け、変更点を中心に説明をいただいた。特に、3つの流れ（第2章1（1）～（3））の再編成と、個別のところでは、「清流の国ぎふ」という言葉を前面に出したことで、社会（前回の基本理念に掲げられていた「持続可能な社会」と基本目標に掲げられた環境・経済・社会の中の「社会」）が重なる部分を回避すること、「ぎふブランド」という名称を、無形のものもあるためもっと広く捉えられるようにすること、といった変更があった。また、第4章「施策の展開」の大事なポイントとしては、「地域循環共生圏」を岐阜に特化したものにしたこと、コロナへの対応策という部分も前面に出ており、人づくりやライフスタイルの転換を図ること、まだこれからという話ではあるが、地域特性を踏まえた取組を整理していくということで説明をいただいた。
- ・それでは、委員の先生方からさらなるご意見を頂戴したい。

(秀田委員)

- ・第3章の計画の方向性について、苦勞して整理されたと思うが、これまでの議論の中でも、「目指すべき将来の姿」を明確にして、それを実現するためにどういう手順で何をどういうふうにしていったらいいか、という構成にすると分かりやすいのではないかと申し上げてきた。3の「目指すべき将来像」の「ぎふエコビジョン2030」で、「目指すべき姿」を具体的に挙げ、それを実現するための施策として、4の「基本方針」がそれぞれ対応するように記述をされたことで、だいぶ分かりやすくなったと思う。
- ・しかし、1の「基本理念」と2の「基本目標」のところで、「目指すべき姿」と実際にそのために何をやっていくのかというあたりが、入り混じってしまっていると感じた。できれば、「ビジョン」の部分と「ロードマップ」の部分は、分けて書いた方が分かりやすい。例えば、1の「基本理念」に「飛山濃水の美しく豊かな恵みを活かし、持続可能な『清流の国ぎふ』を実現」とあり、これが「目指すべき姿」だと思う。それをもう少し具体的に示したものが、3の「目指すべき将来像—ぎふエコビジョン2030—」ではないか。
- ・「目指すべき姿」を実現するための施策を検討するにあたって、基本的な施策の考え方の方向性として、2の「基本目標」のところで、「環境・経済・社会の好循環により、魅力と活力を生み出す地域」を作っていく、「持続可能な『清流の国ぎふ』を担う人づくり」をしていく、といった部分を重点的にやっていくということを示して、それを具体化したものが、4の「基本方針」のところになるという整理が分かりやすいと思う。
- ・既に県議会の方で説明をされて、いろいろと意見もいただいているということなので、あまり大きく変えることはできないかもしれないが、もし可能であれば、そのようにした方が分かりやすいのではないか。
- ・2点目として、第4章「施策の展開」以降について、これまでの審議会でも意見が出たかと思うが、なぜこの数値なのかという数値目標の意味を、県民の皆様にも分かりやすくした方が、県民も協力しやすいのではないか。例えば、この目標数値を設定することで何が実現されるのか、この目標数値を達成しないとどのような困ったことが起こるのか、あるいは少しでも増やした方が良いので、最終的にはここまで増やしたいが、今回の計画期間では、これまでの様子を見てこれぐらいであれば実現できるのではないかと、という形で示してはどうか。
- ・例えば、関係資料一覧の「達成目標」のところで、一番上に温室効果ガスの排出量があり、現状1685万トン、目標1474万トンとある。国の目標として、2050年に実質排出量ゼロにするという全体の最終目標があり、それを実現するために、今回は2025年までに1474万トンにすることで、2050年には実質0にできるという説明があった方が、県民の皆様も理解しやすく、自分は何をしたら良いのか考えることにも繋がっていくと思うので、検討いただきたい。

(岩田環境企画課長)

- ・いかに県民の皆様理解していただくかという点でも重要となるため、ストーリー性という話ではないかと思うが、再度検討させていただく。
- ・なぜこの数値にしたのかという説明が非常に重要で、例えば、温室効果ガス排出量の1474万トンをどのような考え方で設定したかという点では、2050年のゼロカーボン前提として整理している。目標設定の理由が分かれば、県民の理解も進むと思われるので、それぞれの目標が設

定された理由を整理して記載できるように工夫していきたい。

(奥村委員)

- ・「基本理念」で、流行り言葉のように「持続可能な『清流の国ぎふ』」とあり、何が持続可能かという部分について、「基本目標」では環境や経済という言葉で限定もされているが、誰も取り残さず、次の世代に環境や色々な資源を委ねられるといった大きな理念の中で、もう少し県民の皆さんの心にグッと入る言葉だと良いと思う。
- ・岐阜県固有の種が絶滅危惧種も含めてたくさんあるが、岐阜に生まれ、岐阜に住みながらも、身近な固有種を守る意識が少ないと思っている。環境保全として、県の固有種を認識し、守って増やす意識や取組も明言しても良いのではないかと。
- ・岐阜には海がないのに、なぜ海のことを考えるのかと疑問に思った。遠い先のこと、周りの他府県のことを考えることも必要だが、これだけ山と川に恵まれているならば、環境保全は徹底的に川を美しくすると、はっきり明言しても良いのではないかと。ひいては、川の水は海に流れて行くが、私たちは3つの川を有する県として、身近な川から問題をしっかり考えるようなことを、岐阜オリジナルに強く明言してはどうか。
- ・昨年は豚熱やウンカの蔓延など、害虫問題や獣の中での感染症が、私たちの経済に対して他府県まで含めて大きな問題となった。そういった地域の突発的な変化に対して、私たちがどう向き合うのか、どう考えるのかまで踏み込んで、5か年の計画を立てて終わりではなく、この5年の先に何かあるのか分からないということも、言葉を入れてはどうか。今は、人間を脅かす感染症に悩んでいるが、思い起こせば、豚が受難に遭い、養豚場が幾つも閉鎖していくことに対して一生懸命考えていた時期があったはず。

(佐治木部会長)

- ・奥村委員の4つ目の点は、これまでの第4次、第5次を踏まえて、第6次の計画があるということを確認し、第7次に繋げていく必要があるという指摘である。
- ・また、川を徹底的にきれいにすれば、伊勢湾もきれいになるであろうという視点で、岐阜県としての独自の内容を出していこうというご意見をいただいた。

(岩田環境企画課長)

- ・1点目の持続可能という観点については、もともとこの計画自体が、根幹としてSDGsの実現を目指すための計画ということで、ストレートに言えば奥村委員の仰る通りである。岐阜県に置き換えると、持続可能な地域を作るということ自体が、SDGsに繋がるという認識であり、ストレートというよりも柔らかい言葉で表現し、前回の現行計画も踏襲したような形で整理しているためご理解いただければと思う。
- ・2点目の固有種についても仰る通りで、他の部分もだが、しっかり言葉を書き込む必要があるというご意見と理解している。固有種の保全と外来種の防除について、少し記載をしている部分もあるが、それをはっきり書いていく必要があるため、整理させていただきたい。
- ・川の保全についても、川をきれいにすれば海に流れ込むごみがなくなり、海もきれいになるということで、海岸ごみの計画自体は今後立てる予定をしているが、これについても表現を工夫していきたい。
- ・今回のコロナは5年前には想像できなかった事態であり、いつこのようなことが起きるか分からないということで、おそらく他県の環境基本計画にはないような、コロナの部分も記載している。同じように、害虫や豚熱も含めて、今後発生しうる感染症対策や、気候変動にも影響するような内容を意識して記載したつもりではあったが、再度見直しをしていきたい。

(佐治木部会長)

- ・数値目標の評価と、第5次から第6次にどう繋げていくのかということを見ると、例えば、資料1-2のように、到達が「B」までしか行ってない、或いは「D」までしかいけなかった、これは達成できた、ということ、ポリュミーになりすぎる部分もあるが、ある程度取捨選択して前段に置くことで、これに対応して今回は進めていくということが分かりやすくて良いのではないかと。

(小林委員)

- ・「達成目標」にも「家庭1世帯あたりのエネルギー消費量」が出ているが、環境学習で脱炭素や低炭素の話をするときは、家庭での目標値が「J（ジュール）」で表示されている。家庭では「J」という単位にあまり馴染みがないが、他の自治体では炭素量を併記しているところもあり、炭素がどれだけ減ったかということを見てもらった方が分かりやすいため、炭素の排出量を併記してはどうか。炭素量のことを調べていると、色々な計算の仕方があると思うが、1

家庭当たりのエネルギー消費量が出ていれば、係数を掛けて炭素量も出てくると思うので、このモデルにおける炭素量を出した方が、分かりやすいと思う。

- ・SDGsのことも言われたが、SDGsを教えるために17の目標と169のターゲットを説明する際、環境が基礎になって社会や経済があるという説明の仕方をするので、環境の意義を最初のSDGsの紹介で入れると、環境でSDGsを取り上げるという意味が分かりやすくなるのではないかと。SDGs ウエディングケーキというケーキ状の一番下が環境だと思っているので、計画の中で取り入れていく指標がどれなのかという前段の説明が足りないと感じた。
- ・これからよく使うであろう「レジリエンス」という言葉を、「強靱化」という言葉に直されているのか、「強靱化」を使うべきなのか分からないが、計画の中で書かれている言葉でも、これから使うであろう「レジリエンス」や「パラダイムシフト」という言葉の説明も入れながらでないと、防災や気候変動の言葉の意味や使い方が分からなくなるので、コラムの中に言葉の説明みたいなものも入れていただくとありがたい。

(佐治木部会長)

- ・単位の件は、化学の分野でも「J」よりも「kcal (キロカロリー)」に馴染みがあり、関連表をよく見ている。
- ・SDGsの件は、製薬メーカーでも環境に貢献していることを表に出すためにSDGsのロゴを出しており、最近では様々な企業のテレビコマーシャルでも表示されているが、そのベースラインを示していくことが大事ではないか。

(居波環境管理課長)

- ・家庭の消費エネルギーの単位について、おっしゃるようになりにくい面もあるが、統計上の数字を使って把握していくということなので、この数字自体を使いながら、分かりやすい表現を併記するなどの対応も検討していきたい。

(岩田環境企画課長)

- ・単位については、温暖化の計画と合わせていきたい。冒頭でもご意見いただいたが、目標指標の説明を丁寧にしていきたい。
- ・「レジリエンス」という言葉も出たが、環境の計画は言葉が踊って、県民の方に分かりにくい部分も出てくるため、言葉については、用語解説で注釈を入れるか、枕詞を入れるなどで、言葉1つをとっても誤解のないような表記を心掛けたい。
- ・SDGsの説明も、通り一遍のような説明が第2章にあるが、環境との関連を強調できるように整備したい。

(伊藤委員)

- ・一般の県民の方が見た時に、コラムが一番理解しやすく分かりやすい部分だと思うので、なるべくたくさん取り上げてもらいたい。また、写真が入るようなものは、なるべく写真を入れてもらえると、見る人に興味を持って見ていただけたらと思う。

(岩田環境企画課長)

- ・一般の方がご覧になる際、コラムや写真は非常にインパクトがあると理解しているため、できる限りコラムも分かりやすい表現にするとともに、写真も入れていきたい。また、こういうものもコラムにしてはどうかというご意見があれば、いただきたい。

(佐治木部会長)

- ・環境副読本にも、コープぎふさんからの情報提供で、ビニール袋で川の水を温めてご飯を炊くというような、サバイバル技術と環境を組み合わせた内容も記載されている。これを見た大学の研究室の学生たちも感動していた。自分たちのイメージから完全に離れたところから学ぶということも大切なことである。

(大場委員)

- ・豚熱に関しては岐阜県を中心として、北関東まで広がり大きな経済的影響やダメージを与えている。また、田んぼの稲も被害が出ているという話も出たが、トビイロウンカという虫が、中国やベトナムあたりから風で飛んで日本にやってくるという例もあり、地球温暖化も含めて環境問題はボーダーがない、ボーダーフリーである。県の環境審議会で、県を主体に考えることは当然ではあるが、一方で、環境問題はボーダーフリーであるということも意識して、関連の自治体や色々なところと連携体制をきちんと取っていくという姿勢をどこかに入れておかないと、内向き志向になってしまい、本当にそれが環境問題の解決になるのかという疑問も出てくるので、そのあたりも配慮していただきたい。
- ・資料1-1の17ページでは、第5次の時に色々な活動をして、或いは指針を示して県民の環

境問題の意識を高めようということを実践したが、その反省として、実は20代の方たちを中心に必ずしも意識が高まっていない、或いは、実際の生活の中で何をやらいいか分からないといった、意識の課題も挙がっていることが分かった。第5次では、環境学習としての出前講座、生物多様性に関する講習、木育教育、田んぼの学校など、色々なことを取組んでおり、自分や仲間も似たようなことに取組んでいるので、非常に身近な課題であるし、私の学生にもこういう取組が大好きな人が多い。しかし、本当にそれが環境問題や、この環境審議会を抱えているような課題につながっているのかということに、クエスチョンマークである。子どもたちは生き物が好きで興味関心を持ってくれるが、それが本当に日々の生活の中にある、色々な問題にきちんとつながっているのかどうか分からない。第6次で、色々な重点項目が挙げられているが、課題などにきちんとリンクするような講座や仕掛けを作っていないと空振りになってしまうのではないか。例えば、家庭では掛け算を教えて欲しかったのに、学校では足し算を一生懸命教えていたという状態になってしまう気がするため、もう少し仕組みを考えていただきたい。

(岩田環境企画課長)

- ・他県との連携については、特にコロナも含めてだが、国境を越えたボーダーフリーの部分もあり、本文にも記載したつもりではあったが、例えば、海岸ごみの他県との取組など、少し弱い部分もあったため、しっかり書き込んでいく。
- ・環境学習制度の関係では、環境に繋がるように色々やってはいるが、お子さんたちがどう受け取るか、その受け取り方によっては「楽しかった」で終わってしまうところも多いため、それが環境にどう繋がるのかという部分を、どのように理解していただくか考えていく。あまり環境総論でやるよりも、様々な講座から入っていく方法も非常に有効だと思うが、特に大学関係者や、小中高校生に関わりのある審議会委員の方も非常に多いので、ご意見をいただきながら、環境との結びつきを伝えられるような工夫をしていきたい。カワゲラウォッチングなども含めて、それぞれの取組自体は、全国的にも非常に高い評価をいただいているため、どう環境と結びつけていくのかを検討していきたい。

(加藤委員)

- ・子どもたちの副読本の活用の話もあったが、今は1人1端末ということで、子どもたちにタブレット端末を1台ずつ配り、今年度末にはその体制が小中学生について整う予定となっている。学校でもオンライン学習ができ、子どもたちに対する資料の出し方が、従来通りの考え方は駄目なのではないかということ、我々自身も仕事をして感じている。コロナ後の色々なライフスタイルの変化という波が、子どもたちにも押し寄せているということを理解する中で、子どもたちに対してどのような情報提供の仕方があるのか、ただ単に副読本のPDFを貼り付けて見せるというやり方では子どもたちにも分かりにくいのではないかと、ということもある。映像など色々な要素を取り入れた形の資料提供というものが必要になってくるが、次世代の人づくりの大事な要素だと思うので、少し考えていただきたい。

(佐治木部会長)

- ・副読本を、例えば、説明の講演会が自動的に端末から聞ける仕組みや、それぞれの学齢・学年に合わせてレベルを変えながら聞けるような仕組みができると良い。

(岩田環境企画課長)

- ・副読本について、今は紙ベースのもので、それ以外に電子データも提供はしているが、PDFが貼り付けてあるだけとなっている。副読本自体は非常に分かりやすく、皆さんもご評価いただいていると思うが、これをどうお子さんたちに見ていただくか、工夫していきたい。
- ・環境学習という点では、今回、ポータルサイトを作りたいと思っている。市町村も含めて、岐阜県単独の非常に良い動画サイトやホームページを持っているが、うまく伝わっていないところがある。県でも様々な動画配信をしているため、ポータルサイトに繋ぐことで、そういったサイトにリンクできるような形にしていきたい。昨今は、お子さんがそういったところに気軽にアクセスできる能力を持っているため、環境学習ポータルサイトをうまく活用できるように、ご助言をいただければと考えている。

(佐治木部会長)

- ・前回の全体会でもお話させていただいたが、例えば、岐阜県が二酸化炭素をフリーにしていこうという方向で進んでおり、これは国も世界も同様で、世界的な流れとなっている。これを実現していくための1つの方策として、二酸化炭素の排出量をいかにフリーにしていこうかという観点で、例えば、初期投資はかかるが、警察も含めて岐阜県が率先して、公用車を買替える

際に全てを燃料電池車にしていくことが考えられる。もちろん、充電をしなければならないため、電気の発電をどこでやるのかという問題を遡っていく必要もある。いずれにしても、移動に関して実用的に使う分には、二酸化炭素がフリーになる。もう1つ考えられるメリットとして、資料1-2で、EV車や燃料電池車を普及していくという第5次の達成状況が「D」となっており、なかなか難しいことではある。予算がかかるため、県知事から言ってもらえる必要があるかもしれないが、岐阜県が率先して運動を起こしていくことができれば、全国にも先駆けた運動になり、県民の皆さんも必ず付いてくるため、目に見えて二酸化炭素が削減できた、ガソリンがこれだけ削減できたという、経済効果と環境負荷低減の両方にメリットがあるのではないかと感じている。

- ・野生鳥獣による被害防止として、この地域ではニホンジカをある程度淘汰していかなければならない。北海道では、焼肉屋さんのメニューにエゾジカという項目があり、ジビエとして他の肉と一緒に出しており馴染みがある。例えば、岐阜県は山岳地帯があり、どうしても淘汰していかなければならない動物が出てきた場合には、環境保護の取組の1つとして、道の駅や焼肉チェーン店と協力をして、殺傷されたものを無駄にしないという宣伝も非常に大きな効果があるのではないかと。

(岩田環境企画課長)

- ・次世代自動車の導入について、県で購入する公用車にも積極的に導入するというのを、この計画にも書いて進めていきたい。例えば、警察車両や教育委員会関係の車両も含めて使っている車は多いため、どこまで展開できるかということその他の関係機関と調整していきたいと考えている。また、ご意見いただいた中で書き足りないと思った点として、EV車やPHV車は災害にも役立つなど、防災も含めて様々な場面での活用ができるということも整理して反映させていきたい。
- ・ジビエの件は、記載が漏れているというご指摘になると思うが、県でもジビエの取組を団体ごとにしつかりやっており、かなり普及して知名度も上がっている部分が多いため、これも野生鳥獣の管理という中での整理をして記載していく。県庁内横断的に、どのようなことができるかを調整して記載していきたい。

(廣中委員)

- ・先ほど、佐治木部会長からお話のあった公用車のEV車両化について、非常に価値のあることにつながっていくのではないかと思います。電気自動車を使っていく中で、これまでのガソリン自動車と大きく違う点は、充電が必要という点が大きな違いだと思う。これまでは、ガソリンスタンドがあって、そこに行けばすぐにガソリンを入れて燃料を補充することができたが、電気自動車は充電に非常に時間がかかり、これまでのガソリンスタンドのようなビジネスモデルで回っていくものではないため、今後は、自律分散型の充電の仕組みが必要になってくるのではないかと。例えば、個人宅の太陽光発電でできた電力を、家の軒先に作った充電スポットで誰でも使えるよう整備し、地域の電力会社との連携により、充電スポットを使った人から個人宅に利用料が入っていくような仕組みになっていくのではないかと。そのため、個人の家で充電スポットを作る際に、県から何かしらの支援があると良いのではないかと。
- ・岩田環境企画課長からの話にあったポータルサイトの件だが、環境基本計画ができた後に、どう県民に見せて行動変容を促していくのかということが、一番重要になってくる。例えば、「岐阜SDGsポータルサイト」があって、画面上に出てくる「環境」というボタンを押せば、「海のこと」、「川のこと」、「山のこと」というように選べる項目が出てきて、自分の関心のままに押していくと、県内で行われている環境保護ボランティア活動や環境教育活動などの情報に紐づけられており、参加の申込みができると良い。さらに、活動に参加すると「岐阜SDGsポイント」のようなものが付与され、そのポイントが県内のSDGsに関する活動に協賛している地域や商店で使えるようなポイントになると、環境と経済が両輪で回っていくような流れができるのではないかと。

(岩田環境企画課長)

- ・一般論だが、EVスタンドの箇所数は多くても、充電に非常に時間がかかるということで、なかなか使い勝手が良くないという意見もあるため、工夫していく必要がある。
- ・ポータルサイトについては、ご意見をいただいたことも含めて実現していきたい。例えば、岐阜県内でも企業が社会貢献ということで様々な環境保全活動を行っているため、それを紹介できるような機能もポータルサイトに盛り込んでいき、できれば申込みもできるような仕組みも含めて制度設計を進めている。ポイントについては、現時点では想定していないが、将来的に

は実現できると良いと思うので、今回いただいたご意見も踏まえて進めていきたい。

(正村新産業・エネルギー振興課課長補佐兼係長)

- ・廣中委員から、個人の家における充電などについて、何か支援できないかという意見があったが、その点については他の自治体などの情報収集を始め、研究していきたい。

(広瀬委員)

- ・資料1-1の57ページに、「ナッジ」と書いてあり、この言葉で一般の方が文章を読んでも分かりにくいと思われるが、簡単に言うと「自発的に良い選択が取れるように手助けする手法」ということで、同じような内容が重なっているのではないか。
- ・「達成目標」に「新規林業就業者数」の計画があり、2025年までに400人まで増やすというところで、林業というのは里山の保全ということを目的として、就業者を増やしていこうということだと思う。環境とは違うかもしれないが、その業界で働く人の感覚として、「増やしてもらえないのは非常にありがたいが、実際にそれで生活が成り立たないから辞めていく」という意見がある。環境と働く場という部分では担当部署が違うことは良く分かるが、環境側では計画に書いて打ち出している、一方で林政側ではそのようなことを言われても難しい、ということがないよう、情報共有しながら目標値を出していただきたい。
- ・災害がよく起きている中で、例えば、山や川で家が崩れるなどの災害があり、毎年同じような場所で災害が起きているということも考えると、住む場所を安全なところへ移動していただくことが必要ではないか。紐づけとして、「コンパクトシティ+ネットワーク」という文章も書かれているが、「達成目標」の「安全・安心な生活環境の確保と災害から県民を守る強靱な社会づくり」に、「立地適正化計画策定市町村（累計）」を2023年までに10市町村まで増やしていくとしている。最終的な目標が全市町村になるということは分かるが、最初から全市町村とした目標にすべきではないのか。この数字が徐々に上がっていくということは、確かに目標達成が少しずつ現実になっているということだと思うが、最初から100%を目標として掲げるものと、そうではないものは区別していくべきと考える。

(岩田環境企画課長)

- ・「ナッジ」という言葉も、最近使われている言葉ではあるが、聞く人によっては馴染みがないこともあるため、これについては書き方の工夫と、場合によっては注釈や用語の解説を入れていきたい。

(小木曾林政課技術課長補佐兼係長)

- ・林業の新規就業者数についてご指摘をいただいたが、そもそも生活が成り立たないと林業に就いていただけないといった課題や、危険を伴う作業となるため、労働環境を見直して改善していかなければいけないということは、課題として持っている。これらについては、林政部の方で「森林づくり基本計画」を来年度策定するというところで動いているため、この環境基本計画としっかり連携した目標を立てていく。

(岩田環境企画課長)

- ・まちづくりの件は、「適応復興」や「流域治水」という言葉も今回の計画に盛り込んでおり、同じような場所が被害に遭いやすいという傾向もあるため、分野横断的に関係課と連携をして記載の調整をしていきたい。

(秀田委員)

- ・環境基本計画の素案の60ページにある、「各主体に期待する取組」という部分は大変良い試みで、県民の皆様もこれを見て「こういうことならできる」と思ってもらえるのではないかと。環境基本計画と、県民の皆さんを繋げる良い記載だと思う。さらに効果的にしようと思うと、もう少し具体的に「これだけ取り組むとこういう効果がある」ということで、例えば、「残飯をなるべく出さないように」という目標に対して、食品廃棄物が年間幾らぐらいあって、1人がこれぐらい気をつけることでこれだけ減らすことができる、というような数値や定量的なもので、もう1段階み込んではどうか。具体的にこれだけ取り組めば、これだけの効果があるということを見えるようにすると、このコーナーの効果が上がると思うので、全部でなくても良いがコラム的にでも試みていただくと良いのではないかと。

(岩田環境企画課長)

- ・代表的な部分はコラムで入れるほか、将来的にはこの計画をもう少しブレイクダウンした副読本や概要版を作り、ホームページから関係するページにリンクさせるなど、工夫したい。今やっていることが、実際に一人ひとりが取り組むことでどれぐらいの効果につながったかといったイメージが湧くような部分も記載していきたい。

(2) 廃棄物・リサイクル部会における廃棄物計画の策定状況について
事務局（廃棄物対策課長）から策定状況の概要について説明を行った。

(3) 今後のスケジュールについて
事務局（環境企画課長）から今後のスケジュールについて説明を行った。

(佐治木会長)

・以上をもって、予定していた議題は全て終了し、本日の部会を終了する。

<以 上>